



祝

よみたん民泊協力会

ふるさとづくり大賞

団体表彰 — 総務大臣表彰

～地域力の創造・地方の再生～

ふるさとづくり大賞とは

全国各地で、それぞれところをよせる地域「ふるさと」をより良くしようと頑張る団体・個人を表彰することによりふるさとづくりへの情熱や想いを高め、豊かで活力ある地域社会の構築を図ることを目的としています。

—総務省地域力創造室—



ふるさとづくり大賞 団体表彰



全国からメンソ〜レ〜！いちゃりば家族(出会えば家族)
～教育民泊の受け入れを通した村づくりと心の交流～

みんぱくきょうりよくかい

よみたん民泊協力的会

DATA

事例名：全国からメンソ〜レ〜！いちゃりば家族(出会えば家族)
～教育民泊の受け入れを通した村づくりと心の交流～
よみたん民泊協力的会

所在地：沖縄県読谷村字高志保1046番地

連絡先：TEL 098-958-1130
FAX 098-958-1194
直通番号 090-3792-6010 (担当:大城)

ホームページ：<https://sks.okinawa.jp/index.php/service/churamura/education/>

取り組みの概要

よみたん教育民泊事業は、2006年に地元の観光事業者(有限会社沖縄スカイ観光サービス)の地域振興と交流型観光事業としてスタートした。2008年には受け入れ人数が大幅に増加したことを背景に、読谷村・読谷村観光協会推進の下、よみたん民泊協力的会が設立した。協力的会は安心安全の充実した受け入れ体制づくり、受け入れ先としての心得について学ぶ講習会などを企画し、自らを高めサポートし合う組織として活動している。

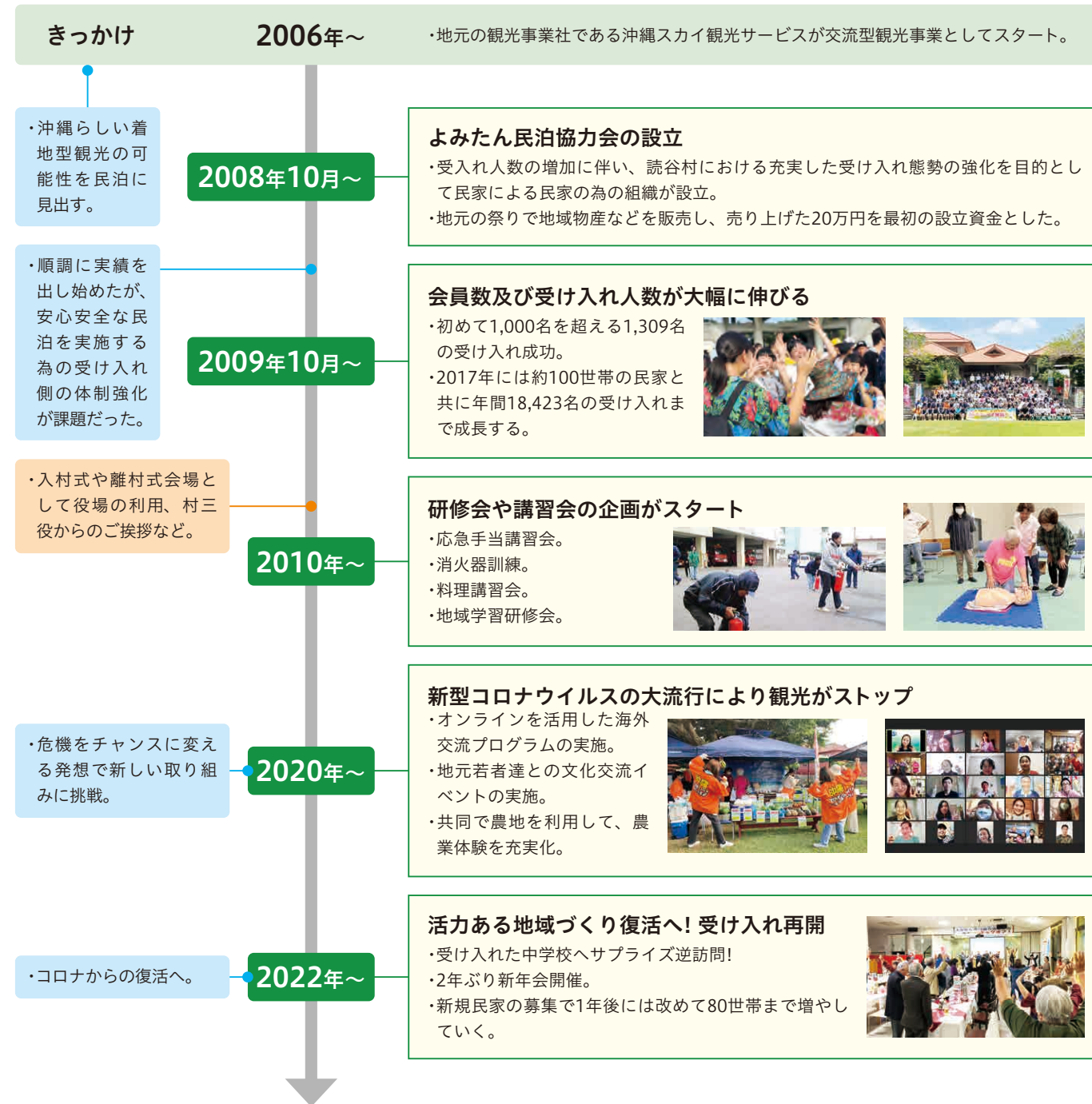
評価された点

- 教育民泊という切り口から地域活性化に取り組んでいる。民泊が村民全体活動の中心に位置づけられ、未来を担う国内外の学生が学び、結果的に地産地消も進むなど、「三方よし」の取り組みに仕上がっている。このような目的意識やターゲットを絞り込んで、そこから地域独自の活性化策を考えていくことは他地域の参考になる。
- 地域内100世帯の民家の協力により民泊事業を展開している点を評価。
- 修学旅行の受け入れなどを完全民間主導及び独自資金で行っている。コロナ禍前で年間15,000人を受け入れ、行政や他団体とも良い関係を築きながら自走している点を評価。

取り組みのプロセス

取り組みを実施するに至った要因・背景や地域課題
その取り組みを実施するに至った要因・背景や地域課題について記載。

行政や外部からの支援
行政や外部からの支援などについて記載。



今後の展望

- ・研修会や講習会などの回数を増やし、新規民家募集や会員活動を充実化させる。
- ・次の世代へ民泊交流事業を継承していきます。

受賞者のコメント

コロナ禍後、2023年春からようやく教育民泊も賑わいを取り戻し始め、再生への一歩を踏み出した中「ふるさとづくり大賞」を表彰されることは、教育民泊の復活に向けて「誇り」と「自信」を取り戻し、改めて我々の活動を評価し

て頂いたと、大変光栄に存じます。読谷村をはじめ関わる人々とこの喜びを共にして、これからも全国の若者たちと沢山の笑顔と思い出づくりをしながら、「学びある教育民泊」の向上に尽力して参ります。

2024 年 02.16(金) 都市センターホテルにて



総務副大臣 馬場様

会長 仲真朝雄

よみたん民泊協力会

教育民泊による交流と村づくり

ー日本全国からメンソーレー！ー

いちやりば家族ー

ちゅらむら読谷
事務局

● 大城 光平

約100世帯で
年間1万8千人受け入れ

「メンソーレー！」は「いらつしやい!」、「いちやりば」は「出合えば」の意味である。

よみたん教育民泊事業は、2006年に地元の観光事業者（有限会社沖縄スカイ観光サービス）の交流型観光プログラムとしてスタートした。2008年には、読谷村におけ



民泊受け入れ勉強会



入村式



みんなで踊るカチャーシー



海外インバウンドの受け入れ



修学旅行生との写真

に協力を頂き、他団体とも良好な関係を築き、連携しながら自走し続けている団体である。

三つのスローガンで理念共有

よみたん民泊協力会では、大きく三つのスローガンを掲げて活動している。

- ・我々は、教育的責任を全うします。
- ・我々は、学び続けます。
- ・我々は、社会に良い影響を与えます。

このスローガンの下、受け入れ民家は単に学生を宿泊させるのではなく、「自身が読谷観光の最前線に立っている」という意識を共に高め合い、地域活動にも積極的に参加し、生涯学習の場としても民泊交流を楽しんでいる。また、この教育民泊事業は、ボランティアではなくしっかりと対価を頂くことが重要な点であり、受け入れ民家は自らの生活を豊かにし、地産地消を心がけ、ほぼ全額が地域に染み込むよう地域振興に寄与している。

協力会は、持続的な組織運営を行

うため、『よ

みたん民泊協力会規約』を正式に定めており、安心安全な民泊を実施するための整備に努めて

いる。会長を含む役員、幹事、会計、監査員を選任し、民家主体組織としての土台を構築している。立ち上げ事業会社である沖縄スカイ観光サービスは社内に地域観光事業に特化した「ちゅらむら読谷」部門を設置し、全国の旅行会社や学校と民泊協力会の間を取り持つ事務局として機能しており、当協力会とは両輪の関係である。

コロナ禍での取り組み
海外学生との交流も

2020年から始まった新型コロナウイルスの影響により交流観光がストップする中、地元の若者と読谷村のおじいおばあとの交流イベントや、オンラインを活用した海外各国の学生との交流プログラムなどを積極的に実施してきた。また、休耕地を整備することで、サトウキビ体験や芋掘り体験ができる環境を整え「観光×農業」を実践している。

これからの挑戦

日本全国の修学旅行生との交流で積み重ねてきたつながりを途絶えさせることなく、さらにインバウンドの受け入れを強化し、今また、未来を担う国内外の学生たちがここ読谷村で交流と学びを深められるよう受け入れ体制を強化していく。